

「それじゃ、いくぞ」

かけ声とともに、健一はグッと腰に力を入れて、なかへ押し進めていく。

「つがああつ！ 痛い、痛い、痛いよ！」

途中までなんの手応えもなく入ったものの、急に弾力を感じる膜のようなものに行く手を阻まれた。

健一は理解している。これが処女膜だということも、この先なにをすればいいのかも。

「なるべく、力を抜いておくんた」

そつと囁くと健一はひと呼吸おいて、力任せにペニスを押しこんだ。

「や、はああつ！ くううつ！」

耳にまとわりつく声を払いのけて、強引に押しこむと、急になかまで滑りこんでいった。どうやら膜を破り、禁断の聖地へと足を踏み入れたようだ。

（処女を、彼女の処女を奪ったんだ！）

健一の動きは一旦とまるものの、押し寄せる肉圧の快感にあと押しされ、腰を動かしはじめた。

「ああああつ！」

苦痛を訴える叫び声。虚しくもその声は届かず、健一の頭のなかは初めて味わうさまざまな快感で破裂しそうになっていた。

「い、痛い！ 痛いですう！ た、たすけ、助けてえ！」

根元まで挿入したペニスに、圧力をかけるように肉の壁が押し迫ってくる。先ほど大量につけた愛液が、ローションの役割を果たしており、すべりは最高だった。

動かすことになんの支障もなく、健一は無心に快感を貪ろうと、腰を大きく動かした。

（す、すげえ！ こ、こんなに熱いなんて！）

体の先端部分しか温められていないはずなのに、体の芯から熱を感じてしまう。

膣内は温かく、侵入者を手厚く迎えるかのように肉が蠢き、肉棒へと容赦なく絡みついてくる。粘度のある液体は、絡みつく肉の壁とともに、刺激的にマッサージが行なわれているようだった。

フェラチオのときはまた違う温かさ、感触に酔いしれ、少女のことを忘れて激しく腰を動かしてしまふ。

「いいよ、本当に気持ちいいよ！」

「あうっ、ううああん！ ほ、本当です、かあ？」



「ああ、最高だよ！　こんなに嬉しい恩返しをしてもらえるなんて」

「そ、それはよか……やああつ！」

幼子おきなのように涙をこぼし、ただ泣き叫ぶ少女。

甲高かんたかく、色気を伴っていた声も気に入っていたが、痛みを伝えようと必死に叫ぶ彼女の声も、また挑発的いじだった。相手を苛いじめていることを実感させるような声は、健一の嗜虐性しやくやくせいを刺激した。

「す、すぐ終わらせてやるから……待ってるよ」

正直、終わらせたくない。こんな時間が永遠につづいてほしいと心から願う。だが、早く頂点を味わってみたい気持ちのほうが強かった。早く彼女を穢けがしたいという淫欲に取りつかれていた。

なにより、健一は夢の時間がこの場で終わってしまうことを恐れていた。

(頼む、この瞬間が過ぎるまでは覚めないでくれ！)

恐れを捨て去るためにも、早く彼女のなかで果てたかった。

「かはあつ！　ううん！　やああつ！」

一方的な腰振りがつづけられていくうちに、少女の口から痛いという言葉が聞こえなくなった。快感を得ているわけではないが、何度も激しく突かれるうちに痛みに慣

れてしまったようだ。

腰を振る速度が増し、それに比例して真夜中の密室に響くピチャピチャといういやらしい音が大きくなり、回数を増し、音との間隔を狭めていく。

（なかに出したい！ この子のなかに自分のことを刻みこみたい！）

健一は腰を動かしながら、そんなことを考えた。いよいよラストスパートに突入した健一のペニスは今にも弾けそうなほどふくらんでいた。あとは穢けがれない子宮の奥に、熱い欲望を注ぐだけ。

「ご、ご主人様の……ま、また大きくなっ……やあっ！ あんっ！」

「そろそろ、イキそうなんだ……なかに、なかに俺のを……」

愛液がどンドン溢れ、すっかりベッドシートにシミができてしまっていた。

「う、ううん、いいですよ！ な、なかに、出してもお！ ひゃあっ！」

自我に吞まれ狂ったように叫ぶネコ耳少女。その言葉を聞いて安心した健一は、激しさを落とす、小刻みな動きへと変えた。

亀頭で愛液をかき集めるようにして、健一は膣内をかきまわした。

「だ、出すぞ！ 恵美、なか出しするからな！ 恵美！」

「はあっ！……め、恵美？」